# 横川末吉先生(四)

山本　保
（会員・佐伯市池船町）

## 戸次川合戦

戸次川に沿う戸次庄（へつぎのしょう）の沃野は、大部隊の展開には有利であった。機会を捉えて、猛禽のように襲いかかろうとした島津家久は、

「一万八千余の軍卒一人も生きて、本国（薩摩）に帰らんと思うべからず」

と、所謂「全員戦死」を呼号して、部下の戦意を高め鶴賀城攻撃にうっ血した士気を一気にばん回した。新納大膳正を中央に、本庄主税介を遊撃として右翼から、家久自身は本隊を率いて中央を後備とし、全軍一団となって反撃を開始したのであった。

四国勢の右翼が、竹中渡しにおける島津軍の「釣野伏」（つりのぶせ）にかかったのは同日夕刻前であった。川中までおびき出された四国勢は、ここで鉄砲隊の一斉射撃を受け、算を乱して倒れた。

これは渡河成功に油断した四国勢を、大混乱に落とした。たださえ呉越同舟の四国の指揮系統は、まっさきに崩壊した。仙石秀久・十河存保・長宗我部元親・同信親は、それぞれ手兵を率いて、各個に絶望的に戦うだけであった。

「釣野伏」の後、息もつかせぬ槍隊の波状強襲をかけて進撃する島津軍の前に、まず戦場を敗退したのは、即時決戦の強硬論を主張し、長宗我部元親・信親父子の持久戦の自重論を嘲笑した仙石秀久、その本人であった。

渡河の広言をよそに、秀久は敗走の旅をつづけて小倉に遁れ、黒田孝高に救われた。皮肉にも渡河に反対した元親父子、わけて信親が、秀久の後退を援護して戦死す

ることとなったのである。

元親父子は、乱軍の中で父は子を、子は父を求めて戦ったが、遂に父子再会の機会は与えられなかった。死を覚悟した元親も、家臣にいさめられ、信親との合流を断念して戦場を捨てた。

僅かに数十人の部下に護られた敗戦の将となった。勝敗は兵家の常といえ、元親の六十年の生涯にも、二度とない屈辱の逃避行であった。元親の長子信親は、

「その時二十二歳なり。男の器量、長（たけ）六尺一寸あり。不断差しの刀は三尺五寸、兼光の刀なり。すべて兵法その外、軽態（かるわざ）並び無き者、この刀をさしてとびとびをせらるるに、走り飛ぶに二間の中飛び付き、この刀をぬかれたり」

と、「長宗我部元親記」は伝えている。

戦国武将として部下の信頼を集めた信親は、最後迄戦場を離れなかった。敗戦の責任を感じた信親の奮戦振りは、「戸次川合戦」の華とし、後世にまで語り伝えられたが、まことに青春無惨な最後でもあった。

寄せ手の島津勢の猛攻を、前後左右に数十合にわたって支えた信親にも、その部下にも、持てる力には限界があった。大小の傷、戦いの深い疲労、ついに信親は、妻の父、石谷兵部少輔等とともに戦死した。信親の周囲には、運命を共にした土佐武士たちのしかばねが、折り重なって倒れた。数えて七百余人、見事な団結であった。

十河存保も、家運再興の夢をたたれて、乱戦のなかで戦死した。

大友勢を代表した戸次統常も、これに殉じた。

こうして戦いは数時間で終わったが、島津軍の夫役（ぶやく）にかり出された戸次庄の農民たちは、乱軍の中で、ふんぬの形相（ぎょうそう）ものすごく、戦い死した四国勢のいがいを収容したが、その数は二千をはるかにこえたのであった。はるばると九州路に、大友氏を救護して戦死した四国勢の運命を哀れみながら、これを葬った農民たちは、「兵農分離」という歴史の巨流がこの悲惨な戦いのなかでつくられていることを、おぼろげながら知らされたのであった。

元親は、信親の救護もならず、命からがら一時府内にのがれた。

しかし島津軍の急追によって、すでに府内城にも断末魔が迫っていた。やがて大友義統は、高崎山城から豊前

龍王城にと逃れ去る。元親も、沖の浜にいた土佐の水軍に乗って、府内を離れた。府内城は、まもなく地獄のごう火のような火炎のなかに滅び去った。島津軍は入城し略奪は行なわれ、豊後国は、すべて島津軍の手中に落ちることとなった。

元親は伊予・日振島にのがれて、再挙を図ったが、「土佐物語」の「信親死がい葬る事」にあるように、骨肉の情制しきれず、家臣谷忠兵衛忠澄と陣僧恵日寺（えにちじ）を関船（せきぶね）に乗せて府内へ送った。それは信親の遺がいをもらい受けるためである。

快諾した島津家久は、仮埋葬した信親の遺がいを、時雨模様の戸次川ほとり山崎の丘で引き渡した。変わり果てた信親に対面した忠兵衛等は、遺がいをだびにして日振島に持ち帰った。元親の悲しみを考えた忠兵衛の深慮であった。のち元親は、信親の遺骨を高野山に送って埋葬せしめ、同時に信親に殉じ、自分の退却を援護した七百の土佐の武士たちを弔ったのであった。

「戸次川合戦」四国勢総敗北は、九州の戦況を一変させた。島津氏の手にほとんど九州全域は落ちた。

豊臣秀吉の出陣の機は熟した。秀吉は、天正十五年（一五八七）三月海路九州路に向けて進撃した。自身は本街道肥後路を南下、弟秀長は東九州を南下し、たちまち島津氏を屈服させた。圧倒的に優勢な秀吉の軍には、島津氏も抵抗できなかったものである。四国勢が島津軍に敗北したのも、兵力の差であった。世は戦国時代で、士気はいずれも盛んである。戦局を決定するのは、兵員と装備の優劣によるのは当然であろう。

もともと、秀吉は四国勢に多くを期待したものではない。ただ豊後国で島津軍と接触し、極力その北上を防止して、秀吉出陣までの時をかせぐということが、四国勢に与えられた任務であった。島津軍の兵力を探知せず、無謀な進撃によって、兵力の差の決定的に示される野戦に持ち込んだ仙石秀久の軍略は、この場合まことに遺憾であった。彼が秀吉への忠勤と鶴賀城救援に焦慮した気持は理解できるとしてもである。

最後に長曾我部氏の運命は、この一戦によって決定的な影響を受けたことを付記しよう。

元親は、領内体制の整備に力を傾けたが、信親死後の継嗣問題で内紛の種をまいた。末子盛親の愛におぼれ、次子、三子を無視して、盛親をあとつぎとしたので、血

で血を洗う家督争いとなり、長宗我部氏の運命を縮めたのであった。

この敗戦で、戦国武将としての元親は、すでに失なわれたも同然であったといえよう。慶長五年（一六〇〇）西軍に組みしたばかりで、長宗我部氏は滅亡したわけではないのである。

それにしても、信親主従七百人戦死の悲劇ほど、土佐の人々に与えた、大きな精神的影響は、ほかにはあるまい。

以来、三百八十年、日本の政治も経済も思想も幾変転を遂げ、また、これからも移り変わるであろうが、「戸次川合戦」の悲劇は、土佐国（高知県）の人々にも、そして現地豊後国（大分県）の人々にも、深い感銘をもって永久に語り伝えられることであろう。

注

文禄元年（一五九二）朝鮮の役に従軍して功績があり従四位待従となった長曾我部元親は、のちに土佐守に任ぜられ、慶長二年（一五九七）また朝鮮の役に出陣し、帰国した。慶長四年五月伏見で死去した。ときに六十一歳。

元親の長男盛親は、関が原の戦いに西軍に味方したため、長曾我部氏は没落し、山内一豊が新たに土州・高知国主（二十四万石）に就任した。

元親の三男秀親は、慶長五年（一六〇〇）関が原の役後、高野山の僧となり、さらに女島地蔵庵に住んでいたが、毛利高政のすすめで、大日寺を創設し、秀乗律師と名のった。

元禄十二年、大日寺に梵鐘を寄進した鶴見町羽出の高橋善左衛門（網方）も、その一人であったといわれている。

公園から望む戸次川

晴天の日、四国連峰がはっきり見える鶴見町下梶寄区には、長曾我部神社がある。戦国時代の大名として、四国を平定した長曾我部一族（天文八年～慶長四年）を祀っている。

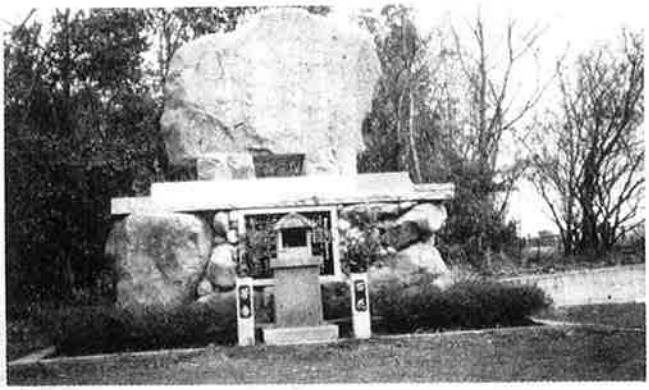
例祭は、春秋二回とりおこない、地区民が、社前でごちそうを囲み、終日過ごす。この地区には、土佐路姓が多いことから、土佐の国から渡って来たという伝承がある。

この神社近くには、海事博物館・渡り鳥館・下梶寄海水浴場・キャンプ場があり、さらに鶴御崎灯台・ふれあい広場・鶴御崎園地なども設けられている。

また、蒲江町畑野浦地区の戸高姓を名乗る人々は、長曾我部氏と縁故があると言い伝えられている。関が原の役に敗れた土佐・長曾我部氏の一党は、海路此の地に逃れ来った。俗称「滝の観音」は、彼等の信仰の中心であるといわれ、この一族の後　も、その血脈は多く、また観音信仰は三百数十年余りの伝統を、今も残している。

墓碑公園にある長宗我部
信親の墓

「戸次川合戦」の墓碑
公園から鶴賀城を望む



墓碑公園の中から